

3. 関連文化財群

(1) 設定の考え方

永く受け継がれてきた歴史文化資源には、それぞれ固有の歴史があり、その歩みの中で同時代や他の時代のものとの間に、何らかの関わりが生まれる場合があります。同じ地域や他所のもの、同じ種類や別種類のものも同様で、さらにこれらが複合的に生じる場合もあります。

そのような歴史文化資源の価値・特性・魅力は、これまで個別的な視点で捉えられることが多く、奥行きや広がりを持った歴史文化資源の価値や魅力を、上手く把握し活かすことを妨げる要因になっていたのかもしれませんが。

そこで、指定・未指定・種別・時代などを問わず、地域の歴史文化の特性や魅力と関連のある歴史文化資源を「群」として捉えることで、個別的な価値・特性・魅力だけに留まらず、これまで把握されていなかったものや、総体としての新たな価値や魅力を発見し、地域の歴史文化を物語る重要な資産として、総合的に保存・活用を図ることを意図して設定されるのが「関連文化財群」です。この関連文化財群は、地域の歴史文化の特性や魅力を象徴する簡略な言葉（テーマ）とともに設定されます。「名取市らしさ」を物語るテーマは、前述の既存資料の整理・分析や資源調査を通じて把握された特性を踏まえ設定しています。

(2) 関連文化財群の設定目的

「関連文化財群」の設定は、「名取市らしさ」を物語るテーマを構成するものを一体として把握することで、新たな群としての価値や魅力を見出し、市固有の歴史文化の特性や魅力の顕在化を図り、分りやすく市民に伝え、郷土の歴史文化への愛着・関心や保存・活用への意識を高め、重要な地域の歴史文化の資産として次世代へ継承していくためのものです。また、地域づくりや観光振興の重要なアイテムの1つとして活発な活動の起因となり、地域固有性・ブランド力といった相乗効果により、名取市の知名度向上にもつなげることも意図しています。

(3) 設定した6群の関連文化財群

次の①～⑤の条件を満たすよう考慮し「関連文化財群」を設定しました。

- ①有形・無形、指定・登録・未指定を問わず多種多様な文化財を含むこと。
- ②地域の歴史文化の特性を踏まえ、名取の歴史文化を物語るものであること。
- ③文化財とともに景観を維持している自然環境、また景観を含んでいること。
- ④市民などによる活用や、今後の活用が期待されるもの。
- ⑤指定文化財等、保護・保全の取組が行われているものや、期待されるもの。

また、設定した関連文化財群は、構成する歴史文化資源にもよりますが、特定の時代や地域だけにとどまらず、時間的にも空間的にも幅広いものを含んでいます。

設定した6群の関連文化財群の内容について、以下に記します。

1. 【愛島・高館の森や海辺の丘と縄文のくらし】

名取の歴史の原点とも言える、旧石器時代、縄文時代の遺跡の多くは、市西部に連なる高館丘陵や、そこから平野部中央付近に突き出した愛島丘陵上に位置しています。これらの遺跡は、我々の先人たちが、それぞれの時代や場所で背景にある自然環境に適応しながら生活し、新しい文化も採用しながら伝統を守り、少しずつ名取らしさを物語る文化を形づくってきた“足跡”ということができるでしょう。

旧石器時代は、氷河期と間氷期が交互にきた時代で、現在よりも寒冷な気候であったことから、海岸線は現在よりも沖合に位置し、平野部も今より海側へ広がっていたと考えられています。この時期の生活の痕跡は、僅かに丘陵部で確認できますが、その後の気候変化などにより多くは、失われてしまったのかもしれませんが、縄文時代には、地球温暖化により海岸線が現在よりも内陸に入り込んできましたが、愛島丘陵の北側では、名取川が運ぶ土砂に押し戻されて侵入は抑制され、早くから湿地帯の平野が広がりました。一方愛島丘陵の南側では、海岸線が西部の丘陵付近にまで入り込み、恵み豊かな内湾が形成されたと考えられており、当時の集落・貝塚などの分布や、周辺に残る海に関わる地名なども、そのことを物語っています。生活の拠点とした丘陵上には豊かな森が、丘陵下には、名取川の清流や湿地が広がる平野、穏やかな海があるなど、恵まれた自然環境下にありました。

名取の地は、縄文時代初めの頃には、既に仙台平野でも有数の生活拠点であったことでしょう。高館丘陵や、愛島丘陵上で発見された今熊野遺跡や泉遺跡の大規模な集落は、そのことを示しています。

当時の生活の「住」を示すものでは、今熊野遺跡や泉遺跡の大集落、中期の複式^{ふくしき}炉^ろを伴う前野田東遺跡の住居跡群などがあります。

「食」の痕跡は、宇賀崎や金剛寺^{こんごうじ}などの貝塚群から、貝類や魚などの自然遺物のほか、木の実や動物の骨も発見され、海や川だけでなく豊かな里山の存在もうかがわせています。また、食べ物を煮炊きした鍋や食器等の土器も出土し、当時の食文化をよく表しています。豊かな幸を海に求める姿は、現在の産業の一つとしても息づいており、先人達も食べ貝塚などで出土しているアカガイは関上の特産品にもなっています。



「衣」の部分では、貝殻や動物の骨で作った貝輪、土製の耳飾りなどの装飾品も出土し、当時の豊かな生活ぶりも知ることができます。また、土偶や犬を埋葬した跡などからは当時の精神面の一端をうかがい知ることもできます。

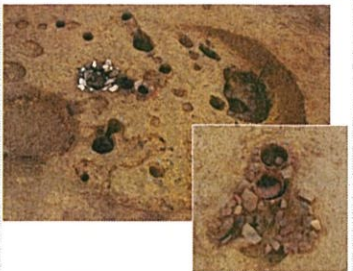
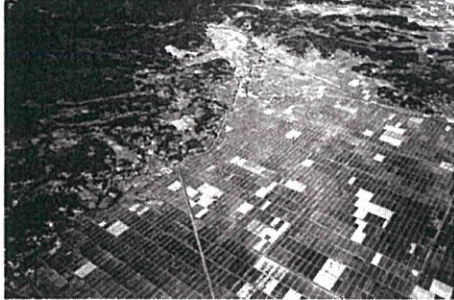

遺跡や貝塚からは縄文時代の「衣」「食」「住」の情報などを、「人と自然とのたゆまぬ共生」を物語る文化財が数多く出土し、狩猟・採集の暮らしをよく伝えていきます。

この自然との共生を物語る歴史文化資源を群として考えました。構成する文化財で核となるものには、主要な縄文遺跡や出土品などがあげられます。

●関連文化財群を構成する歴史文化資源

関連文化財群を構成する主な歴史文化資源としては下表のようなものがあります。

核となる文化財	説明	写真
<p>遺跡</p> <p>野田山遺跡</p>	<p>約2万年前の後期旧石器時代から平安時代にかけて、断続的な生活の跡がある名取最古の遺跡です。</p> <p>平成12年の調査では、旧石器が多く発見されました。また、古墳時代前期の住居から見つかった土師器甕(はじきかめ)は、当時の近畿地方の土師器に認められる特徴を持ったもので、近畿地方との交流があったことがうかがえます。</p>	
<p>遺跡</p> <p>今熊野遺跡</p>	<p>6,000年前の縄文時代前期の大規模集落跡が見つかった遺跡で、東北地方で初めて方形周溝墓が確認された遺跡として注目されました。調査では70棟もの竪穴住居跡、貯蔵用の穴、墓などが見つかりました。捨てた貝の層もあり、そこからは煮炊きに使われた土器や調理・狩りに使われた石器なども多く発見されています。また遺跡の重要性から、県下でも先駆けとなる保存運動により未調査区と調査区の大半は保存されました。</p>	
<p>貝塚</p> <p>宇賀崎貝塚</p>	<p>愛島丘陵の南縁から南へ半島状に突き出た標高12.7~7.5mの斜面に広がる遺跡です。南斜面と東斜面との2箇所に貝層の広がりがあります。東斜面の貝層については、昭和47年(1972)に調査が行われ、上部のヤマトシジミを主体とした層、下部のハマグリ、アサリを中心とした貝層が確認され、出土遺物から、下部は縄文時代早期~前期、上部は縄文時代前期中頃のものと考えられています。</p>	
<p>貝塚</p> <p>大木戸貝塚</p>	<p>雷神山古墳西側の丘陵部、清水峯神社北東畑内に広く貝殻が散布していました。名取ニュータウンの建設により昭和42年に一部調査が行われましたが、その後工事により消滅しています。調査によれば、貝層は淡水のヤマトシジミを主体とし、一部カキ・アカガイ・ニシ類など鹹水(かんすい)産の貝類も混在しています。遺物は縄文土器、石鏃などの石製品が出土しています。出土土器から縄文早期に形成されたものと思われます。</p>	
<p>出土品</p> <p>金剛寺貝塚</p>	<p>尾根上平坦部標高50m付近に、東、南、北斜面の3箇所で貝層が確認されています。北側の部分は昭和22年に調査され、ヤマトシジミを主体としたアサリ、ハマグリなどの貝類、石鏃などの石製品、骨針などの骨角器、縄文土器(前期・後期・晩期)、弥生土器、須恵器などが出土しました。この地点の縄文土器は古くから、金剛寺式と呼ばれる縄文後期の代表的な土器として知られており、本貝塚はこの時期の標式(ひょうしき)遺跡となっています。</p>	

<p>遺跡</p> <p>前野田東遺跡</p>	<p>縄文時代前期～中期、弥生時代中期～後期、古墳時代中期、古代の遺構、遺物が出土しています。縄文中期の住居跡では、複式炉(ふくしきろ)と呼ばれる、炉の部分に土器を埋め込んだ部分と、石を組み合わせた複数の炉を持つ構造のものが見つかりました。</p>	
<p>景観</p>	<p>なとり100選・市民環境調査</p> <p>・眺望地点 ・自然の風景</p> <p>昭和40年頃</p> 	
<p>その他</p>	<p>地名</p> <p>小豆島 宇賀崎、笠島など</p> 	

核となる文化財	関連するもの
<p>遺跡 野田山遺跡、今熊野遺跡、泉遺跡、前野田東遺跡、原遺跡</p> <p>貝塚 金剛寺貝塚、宇賀崎貝塚、大木戸貝塚、柚木貝塚</p> <p>出土品 縄文土器、土偶、石鏃、磨製石斧、貝刃、貝輪、耳飾などの遺物、貝類、魚類、哺乳類(シカ、クジラ)など自然遺物</p> <p>その他 地名(宇賀崎、松崎、山崎、周防崎、鳥井崎、小豆島、笠島など)</p>	<p>動植物に関するもの：コナラ、クリ、スギ、ヒノキ、オオタカ、ゲンジボタル、トウホクサンショウウオ、ニホンカモシカなど</p> <p>自然環境に関するもの：丘陵・平野の成り立ちを示す化石等(植物化石、泥炭)</p> <p>景観：</p> <p>【眺望地点】</p> <p>高館山、野田山、十三塚</p> <p>【自然の風景】</p> <p>小豆島・笠島周辺、高館川上周辺</p> <p>(なとり100選・市民環境調査による)</p>

表12：関連文化財群を構成する歴史文化資源①

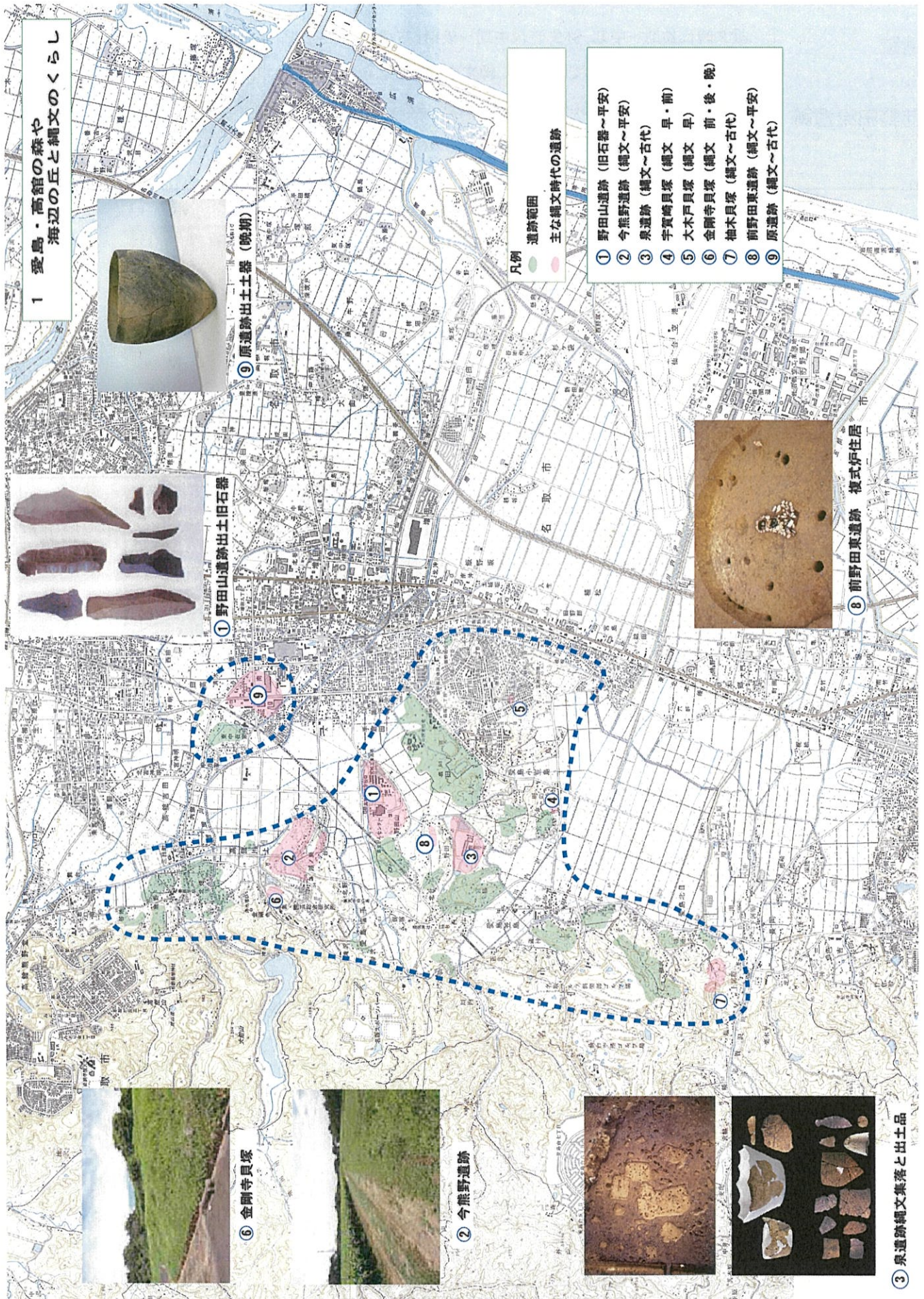


図23：関連文化財を構成する歴史文化資源分布図①

2. 【雷神山古墳と花開いた古墳文化】

眼下に名取平野を見下ろす愛島丘陵の東端部に、全長168mの東北最大規模を誇る雷神山古墳があります。4世紀後半頃に築造されたこの前方後円墳は、当時では東日本でも最大級の古墳であり、当地に広範囲に影響力を持った有力な豪族がいたことや、築造を可能にするだけの政治的・経済的な基盤があったことを物語っています。

これだけの巨大な古墳を築造するためには、多くの労働力を支える高い生産力が必要です。気候の寒冷化に伴う海岸線の後退により、縄文時代の終わり頃から弥生時代になると人々の生活の舞台は、平野部の自然堤防や浜堤などの微高地上へも広がります。十三塚遺跡で見つかった九州の弥生前期の特徴を有する遠賀川系の土器や、平野部の原遺跡出土の石包丁や大陸系の磨製石斧^{ませいせきよ}などは、早くから狩猟・採集のくらしに稲作が加わり、しだいに安定した生活基盤が整って行ったことを示すもので、後の古墳文化発展の基礎となったものです。

古墳時代の初め頃には、海岸部付近にまで生活範囲が拡大し、下余田・鶴巻前遺跡などの大集落も形成され、それに伴い形態・場所・規模などを変えながら多くの古墳も築造されました。

雷神山古墳築造に象徴される古墳文化が花開いたこの時期は、名取の地が東北屈指の拠点として発展するなど、その歴史文化の中でも、特に重要な位置を占めるものです。

東北最大規模を誇る雷神山古墳と小塚古墳、前方後方墳・方墳で構成される古墳群の北限とされる飯野坂古墳群を中核とし、西部の丘陵上の古墳、平野部の自然堤防や浜堤上に展開する古墳、それを支える当時の人々が生活した集落遺跡、出土品の他、塚にまつわる伝承や記録、景観なども関連する群として考えました。

その他、構成する文化財の中で核となるものには、丘陵上では、東北初の発見となった今熊野遺跡の方形周溝墓や、中期後半以降では、東北最大の帆立貝式の墳丘を持つ名取大塚山古墳や賽ノ窪古墳群^{おんなんやま}などがあります。



平野部では、天神塚古墳、温南山古墳、長持型石棺・鎧形や家形埴輪（国重文）等が出土した経ノ塚古墳、中期の群集墳である下増田飯塚古墳群があります。規模の大きな拠点的な集落遺跡には、十三塚遺跡や今熊野遺跡、清水遺跡、上余田遺跡などの他、近畿や東海・関東地方などの影響を示す土器が出土した、八幡・下余田・鶴巻前・野田山遺跡や下増田飯塚古墳群があり、交流の広さを示しています。

この他、増田や下増田の塚に関する伝承・記録や、雷神山古墳など墳丘から見える景観も関連する群としてあげられます。

●関連文化財群を構成する歴史文化資源

関連文化財群を構成する主な歴史文化資源としては下表のようなものがあります。

核となる文化財	説明	写真
<p>遺跡</p> <p>十三塚遺跡</p>	<p>名取市を代表する遺跡の1つで、愛島丘陵の北部にあり、野田山遺跡に対面する丘陵上にあります。</p> <p>標高20～30mの付近全体に遺跡が広がり、これまでの発掘調査で、弥生時代～古墳時代の住居跡や、縄文時代～平安時代の土器や石器などが出土しています。</p> <p>なかでも、弥生時代中期後半の土器は、周辺地域のこの時期の典型的な土器として「十三塚式」の名前が付けられています。また、弥生時代前期の遠賀川式に似た土器が出土したことも知られています。</p> <p>平成2年、遺跡と重要な出土遺物は市の指定となっています。</p>	 
<p>遺跡</p> <p>原遺跡</p>	<p>自然堤防上に広がる遺跡で、弥生時代中期の墓やゴミ捨て場が見つかりました、稲穂をつみ取る道具の石包丁なども発見されており、周辺の後背湿地では稲作をしていたものと考えられます。</p> <p>古墳時代前期～中期の住居跡、中世の建物跡なども見つかりました。</p> <p>地震による地面の液状化現象で現れた噴砂や、地層が歪められてできる褶曲の痕跡が遺跡の地層から発見されました。</p>	 
<p>古墳</p> <p>雷神山古墳</p> <p>小塚古墳</p>	<p>東北地方最大の前方後円墳で、市内中央に位置する愛島丘陵、標高40m前後の東端に位置しています。古墳の規模は全長168m、後円部径96m、高さ12m、前方部長72m、前端幅96m、高さ6mです。墳丘は三段に築成され、葺石があり一部に周溝も確認されています。壺形埴輪(つぼがたはにわ)や壺形土器が出土しています。築造年代は、4世紀後半頃と推定され、広い地域を統治した地方豪族の首長の墓と考えられています。昭和31年、国の史跡として指定されました。</p>	 
<p>古墳</p> <p>飯野坂古墳群</p>	<p>雷神山古墳から北に1km離れた同じ丘の上であり、前方後方墳5基と方墳2基が一群をなして分布しています。薬師堂古墳、宮山古墳、山居古墳、山居北古墳が並び、東側に観音塚古墳、観音塚北1号墳・2号墳があります。</p> <p>正式な調査はされていませんが、出土遺物などから、4世紀代に造られたと考えられています。</p> <p>狭い範囲に前方後方墳と方墳が群をなす例として日本の北限であり、貴重な文化財として、昭和53年国の史跡に指定されています。</p>	

<p>古墳 今熊野 方形周溝墓</p>	<p>東北地方で初めて発見された古墳時代前期の方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)で、調査では10基以上が見つかりました。</p> <p>方形周溝墓とは弥生時代から古墳時代初期にかけてつくられた墓で、周りに四角く溝を掘り、中央部に土を積み上げ、埋葬施設を作ります。調査では同時期の集落跡も見つかっており、また周辺には前期の前方後円墳を含む古墳群もあり、同時期の関連を考える上でも重要な遺跡です。</p>	
<p>古墳 下増田 飯塚古墳群</p>	<p>海岸線から2km、内陸部の浜堤上にあります、かつては「下増田七塚」と呼ばれていましたが、最近では兵糧塚古墳、雷神塚古墳、塚根塚古墳、毘沙門堂古墳の4基は確認することができました。</p> <p>発掘調査で、7m～50mの円墳を主体とする古墳が十数基見つかりました。古墳群の中の1基、塚根塚古墳は、直径約28mの墳丘に、幅9mの周溝を持つ円墳であることがわかりました。遺跡からは、副葬品として豊富な鉄製品、他地域との交流を示す土器が出土しています。</p>	
<p>出土品 経ノ塚古墳</p>	<p>直径36m、高さ約7mの周溝(しゅうこう)を伴う円墳で、明治45年の調査で家形(いえがた)埴輪や鎧形(よろいがた)埴輪などが発見され、5世紀中頃の古墳とされています。大正12年には石棺と中から2体分の人骨や副葬品などが発見されました。</p> <p style="text-align: right;">左・鎧形埴輪 右・家形埴輪</p>	

核となる文化財		関連するもの
<p>遺跡 古墳 出土品 その他</p>	<p>原遺跡、宮下遺跡、十三塚遺跡、鶴巻前遺跡、下余田遺跡</p> <p>雷神山・小塚古墳、飯野坂古墳群、今熊野遺跡方形周溝墓、宇賀崎古墳群、名取大塚山古墳、賽ノ窪古墳群、経の塚古墳、温南山古墳、下増田飯塚古墳群、天神塚古墳</p> <p>弥生土器、土師器、底部穿孔土器(雷神山古墳)、石器(他地域との交流を示すもの・土器形式、石器素材)、埴輪、鉄製品、石棺</p> <p>増田・下増田七塚の伝承</p>	<p>雷神様の石碑、山田古墳、カラト塚古墳、熊野堂横穴墓群</p> <p>景観： 【眺望地点】 雷神山 【自然の風景】 雷神山、十三塚周辺 (なとり100選・市民環境調査による)</p> <p>伝承・伝説など： 「ぬか塚物語」「兵糧塚」</p>

表13：関連文化財群を構成する歴史文化資源②

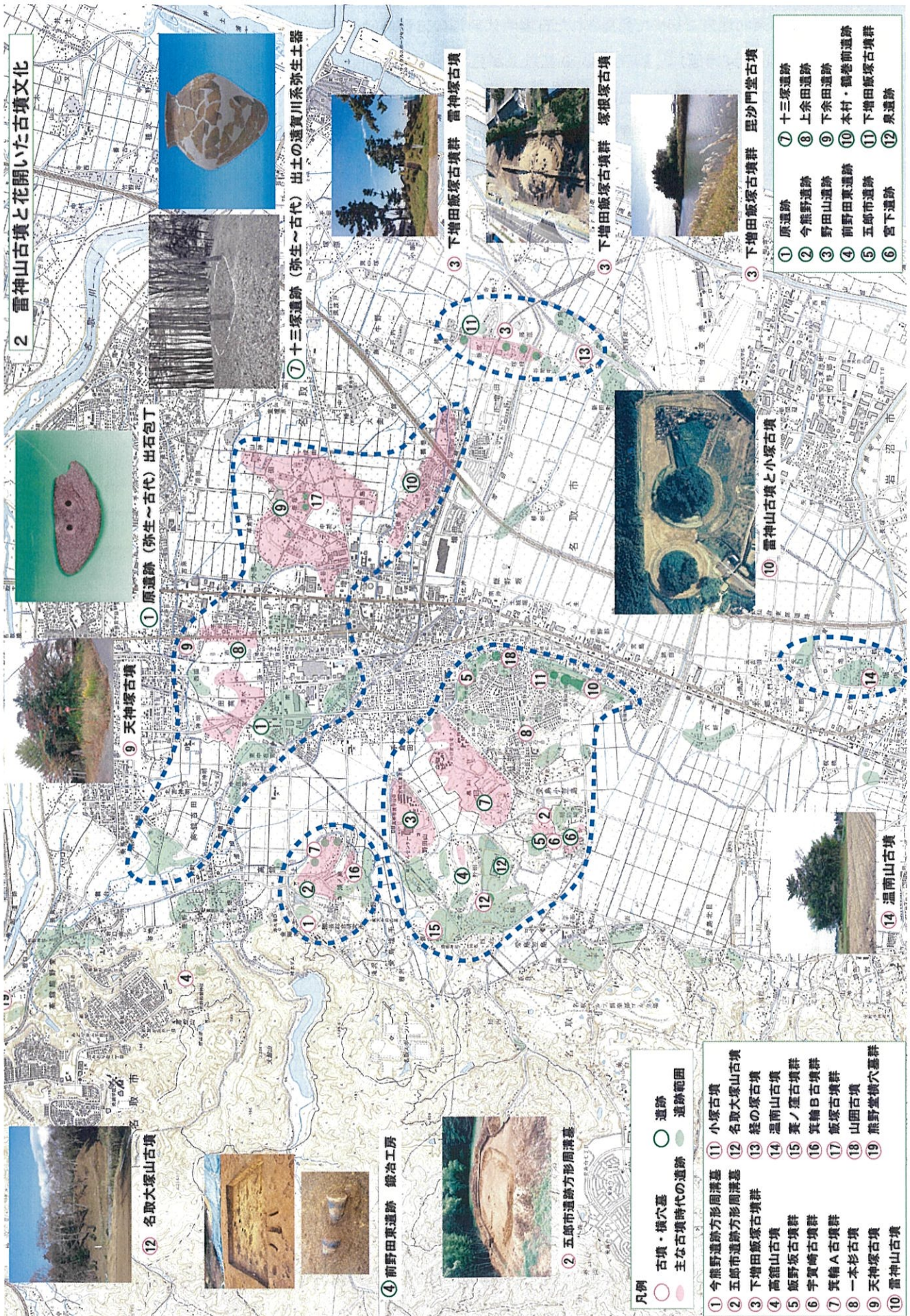


図24：関連文化財を構成する歴史文化資源分布図②

3. 【名取郡の成立と実方中将】

7世紀終わり頃には、多賀城以前の陸奥国府（郡山遺跡）が名取に置かれていることから、当時の名取が東北地方の太平洋側における政治・文化の重要拠点として、広く知られていたことがわかります。「名取郡」と記した文字資料には、平城京から出土した、天平元年（729）に「名取郡」から昆布を納めたときの荷札木簡が知られており、それ以前には「名取郡」が成立していたことが分ります。

また、文献での初見は、『続日本紀』天平神護2年（766）の条にある名取竜麻呂、「名取郡」としては神護景雲3年（769）の名取郡の人吉弥侯部老人の記事があり、これらのものは、「名取」としての始まりを示すものです。

多賀城が新たな国府となり政治的な中心が北へと移った8世紀前半以降も、「名取郡」には、多くの人々が暮らした様々な痕跡を見ることができます。

畿内と多賀城を結ぶ、当時の幹線道である「東山道」が整備された愛島丘陵沿いには、東山道（後の東街道）の跡と伝えられ、竹林内の旧街道の佇まいを残す景観や、延喜式内社である佐具叡神社跡、瓦が出土し礎石とされる石が残る笠島廃寺跡、道祖神社、公的機関とかかわりをもつ有力者の居宅跡と思われる前野田東遺跡、須恵器などの生産に関わる北野・南台窯跡があります。

また、熊野堂地区の丘陵斜面には、熊野堂横穴墓群（市指定）があり、100基以上に及ぶ横穴墓と、鈴釧、鉄鏃、須恵器、土師器など豊富な副葬品も見つかっています。これらは7～8世紀のこの地域の有力者の集団墓と考えられるもので、この周辺を拠点に活動した集団の「いのりの空間」として、後の熊野三社へと受け継がれたのかもしれない。

平野部では、名取川や阿武隈川などに育まれた肥沃な名取耕土を基盤に、自然堤防や浜堤などの微高地を中心とする、市内のほぼ全域へ生活の舞台が拡大し、「名取の里」には清水遺跡、下余田遺跡、鶴巻前遺跡などの大規模集落が展開しています。清水遺跡では建物群や、円面硯、軒丸瓦、墨書土器などが出土し、何らかの公的施設との関わりをうかがわせるものです。この他、独染、横笛が出土しており、暮らしの一端を垣間見ることができます。

この他、平野部では「市坪」「余田」「千刈田」など条里制や租税に関する地名ではないかと考えられるものも残っています。


また名取は、風光明媚な土地でもあり、歌枕としても名高く、和歌、詩文などにも多く詠まれています。中古三十六歌仙の一人であり都の花形貴公子であった藤原実方は、長徳元年（995）に陸奥守に任命され、歌枕の地の巡検を命じられて多賀城に赴任し、その任期中に道祖神社前で落馬により没したと伝わり、その場所や伝承地などが残されています。その後も多くの文人・歌人に愛された実方中将の旧跡を訪ね、西行や芭蕉を始めとする多くの文化人が当地を訪れ足跡を残しています。

「名取」の成立や、東山道や名取の里に残る伝承や歴史文化資源、市民から支持されている自然景観や歴史的景観を合わせ、群として設定しました。

●関連文化財群を構成する歴史文化資源

関連文化財群を構成する主な歴史文化資源としては下表のようなものがあります。

核となる文化財	説 明	写 真
<p>遺跡 清水遺跡</p>	<p>旧名取川や旧増田川により形成された自然堤防上に広がる遺跡で、古墳時代から中世にかけての集落が発見されました。</p> <p>奈良～平安時代にかけての住居跡が多くを占め、平安時代の井戸からは、独楽(こま)、横笛が発見されました。また円面硯、軒丸瓦、墨書土器などが出土していることから、当時の公的な機能をもった集落であったと考えられています。</p>	
<p>遺跡 前野田東遺跡</p>	<p>縄文時代前期から中期、弥生時代中期～後期、古墳時代中期、古代の遺構、遺物が出土しています。</p> <p>遺跡からは、奈良～平安時代の溝で区画された地区内に、竪穴遺構や掘立柱建物が規則性をもって作られています。このような規則性を持った建物群は、当時の役所的な機能を持った遺跡と考えられています。</p>	
<p>遺跡 笠島廃寺</p>	<p>道祖神社の表参道沿いに位置し、東街道の名残をとどめる竹やぶの中にある遺跡で寺院跡と考えられています。</p> <p>昭和 26・27 年の調査で塔があったとみられる高まりと、礎石も残り、屋根にふかれた古代の布目瓦(ぬのめがわら)が発見されています。遺物から奈良・平安時代のものと思われる。</p>	
<p>その他 実方の墓</p>	<p>平安時代の貴族で歌人の藤原実方朝臣(ふじわらさねかたあそん)が陸奥国の国守として多賀城に来ていた時、道祖神社の前を馬上のまま通ったことが神の怒りにふれ、落馬がもとで亡くなって葬られたとされる墓です。</p> <p>中古三十六歌仙である実方の墓には後に多くの歌人が訪れており、西行法師や正岡子規などが知られています。</p>	
<p>建造物 道祖神社</p>	<p>藤原実方朝臣の伝説とともに残る愛島笠島にある神社です。江戸後期に建築されたと推定される素木造(しらきづくり)の本殿や、ご神木のタラヨウの巨木(宮城県が北限とされ、巨木は珍しい)、9人の社家の子孫が伝える道祖神神楽など建物と伝説、芸能が一体となって受け継がれています。道祖神神楽は民俗文化財として昭和 61 年県の指定となっています。</p>	

<p>石造物</p> <p>西行法師歌碑</p>	<p>塩手の山林に葬られたと伝えられている実方のお墓には、その後 に多くの人が訪れています。平安時代の末には西行法師、南北朝 時代には宗久(そうきゅう)、江戸時代には松洞馬年(しょうとうばね ん)、明治時代には正岡子規などで、その多くは歌人たちです。</p> <p>中古三十六歌仙の一人として活躍し、悲運の死をとげた藤原実方 ゆかりの地は、歌人たちにとっては特別なところだったようです。</p> <p style="text-align: center;">左 西行法師の歌碑 右 松洞馬年の歌碑</p>	
--------------------------	--	---

核となる文化財	関連するもの
<p>遺跡 笠島廃寺跡、佐具叡神社跡、前野田東遺跡、 清水遺跡、下余田遺跡、鶴巻前遺跡、北野・ 南台窯跡、熊野堂横穴墓群、賽ノ窪古墳群</p> <p>出土品 鈴釧、円面硯、墨書土器、独楽、横笛、瓦</p> <p>建造物 道祖神社、多賀神社</p> <p>石造物 西行法師歌碑、草鞋塚、芭蕉の句碑、</p> <p>その他 実方の墓、延喜式、実方の落馬や地名伝説 (馬停地・寓舎宅・笠懸の松)、能楽「実 方」</p> <p>地名 市坪、余田、千刈田、圭田など</p>	<p>山田古墳</p> <p>その他 『和名類聚抄』、宗久、道與『廻国雑記』、 松洞馬年、正岡子規「はて知らずの記」、古今 和歌集、新古今和歌集、名取川、奥州名所図 会、『古示談』、『十訓抄』、『源平盛衰記』</p> <p>生産に関するもの：木炭窯跡、須恵器窯跡、鍛 冶遺構、土器焼成遺構</p> <p>動植物に関するもの： 古代スギ(熊野那智神社) タラヨウ(道祖神社)</p> <p>景観： 【自然の風景】 笠島廃寺・道祖神社周辺、北目周辺、高館 吉田から田高周辺</p> <p>【歴史的景観】 東山道・東街道の面影を残す竹林 (なとり100選・市民環境調査による)</p> <p>伝承・伝説など： 「日本武尊の伝説」、「皇壇ヶ原」</p>

表 14：関連文化財群を構成する歴史文化資源③

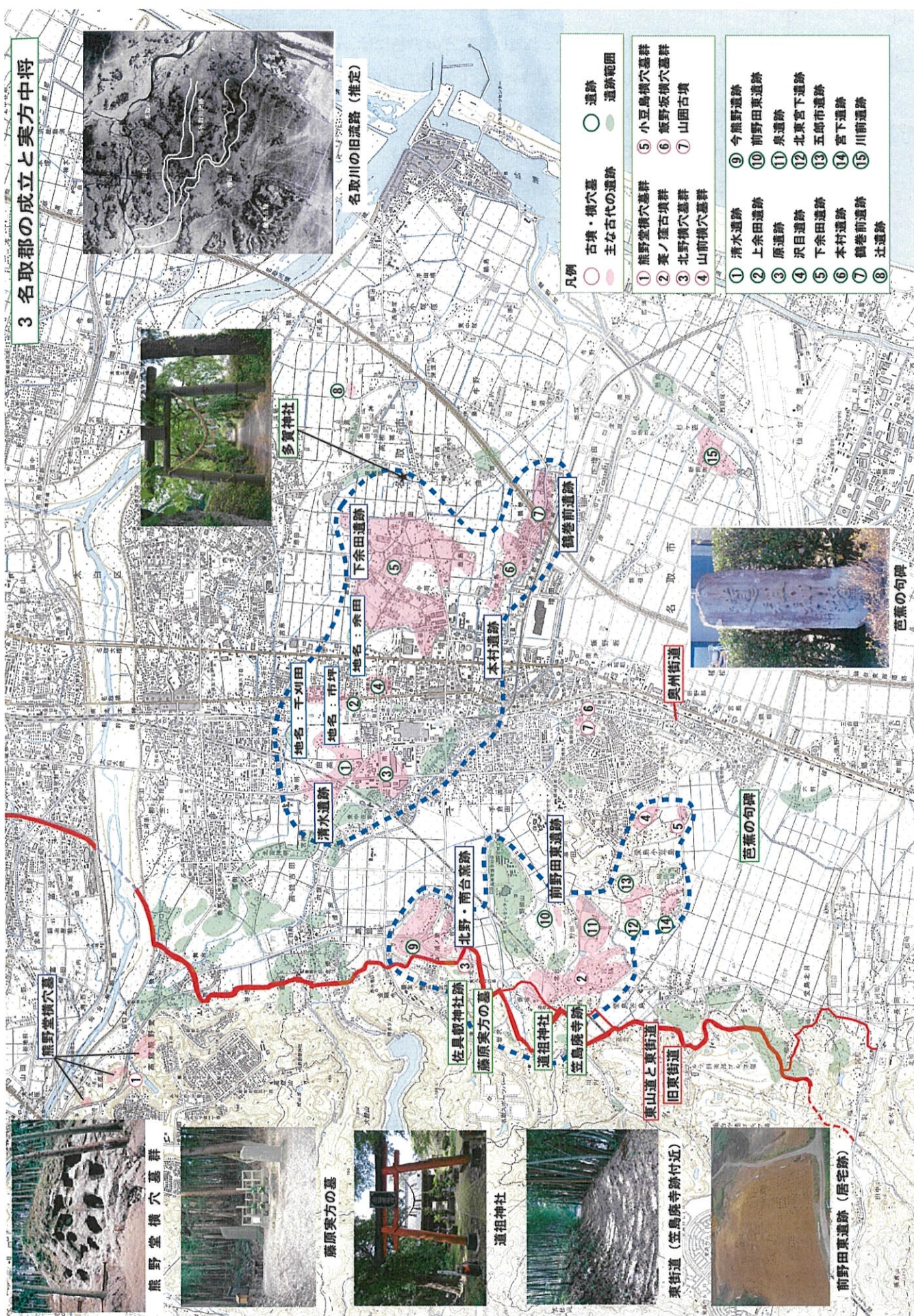


図25：関連文化財を構成する歴史文化資源分布図③

4. 【熊野三社と名取老女】

世界遺産として著名な紀州和歌山の熊野三山や熊野信仰に関わる社寺は、全国3,000ヶ所以上あると言われる中、東北地方にその約1/4の800にも及ぶ数があり、遠隔地にも関わらず多くの人々が信仰していたことが分かります。中でも平安時代後期に名取老女によって勧請されたとされる名取熊野三社は、本宮・新宮・那智のそれぞれが独立している稀有な特徴を有し、東北の熊野信仰布教の中核を担う施設であったと考えられています。

三社が立地する高館丘陵を熊野連山に、眼下に広がる仙台湾を熊野灘、名取川を熊野川に見立てた立地や、本宮社の音無川、那智神社に設けられた那智の滝など、紀州熊野の世界を当地に再現する強い意志が認められます。また、成立当時は現在地より南側を流れていた名取川を隔てた丘陵上に霊場を設けるなど、神聖な空間の演出にも紀州熊野への意識が表れています。

その背景には、紀州熊野と同じく、古くから豊かな自然が信仰対象とされてきた山々の性格や、熊野堂横穴墓群が築かれるなど「祈りの場」としての空間の性格があったのかもしれませんが。

こうした数々の熊野信仰布教を目的とした演出は、遠く離れた紀州熊野への参詣が難しい東北の人々への布教を意図し、名取熊野三社の成立後に次第に整えられ、武士だけでなく一般の人々からも多くの信仰を集めてきました。本宮・新宮・那智の三社がある区域には、そのことを物語る豊富な有形・無形の文化財や、伝承などが残されており、空間としての保存・活用が期待されます。

また、名取熊野三社の縁起にも記され、その成立に深く関わる「名取老女の説話」は古くから有名で、寛正5年(1464)に、能楽を大成した世阿弥の甥の音阿弥が上演した「名取ノ老女」(別名「護法」、「名取姫」)は、この説話を基に作られたとされているものです。その他、市内には、熊野神社本殿脇に建つ「老女の宮」、下余田地区の「老女の墓」、中田(現仙台市)の「老女神社」など、老女ゆかりの場所なども多くあります。

三社を除き構成する文化財で核となるものには、熊野神社(新宮社)の別当寺である新宮寺や宿坊跡、熊野神社本殿などの建造物、熊野神社文書、三社関係者の大規模な墓所である大門山遺跡や、高館城や大館跡などの山城、熊野堂神楽や舞楽などの民俗文化財等の他、名取老女の説話や、那智神社からの景観などがあります。さらに、平野部や海岸部にも、下余田の熊野三社や、閑上の那智神社、下増田の熊野神社等があり、閑上には那智神社から、下増田には本宮社から「お浜降り」と呼ばれる神輿を運ぶ神事も行われていたことが伝えられており、これらも関連する文化財としてあげられます。こうした拠点当地へ設けられたことは、古代には政治的な中心は北へと移ったものの、古墳時代をはじめ、古くから東北の政治・文化の


要衝地であったことによるものであり、熊野信仰で結ばれた一連の歴史文化資源は「名取らしさ」を物語る大きな特徴の一つと言えるものです。

●関連文化財群を構成する歴史文化資源

関連文化財群を構成する主な歴史文化資源としては下表のようなものがあります。

核となる文化財	説 明	写 真
建造物 熊野本宮社	<p>本宮十二神(ほんぐうじゅうにじん)とも呼ばれます。以前は南に500m程離れた小館と呼ばれる山上にありましたが、万治元年(1658)に現在地に移ったと伝えられます。</p> <p>神社に伝わる古文書からは、伊達家の当主から御神輿や馬道具、玄米などを拝領した記載があり、伊達家との深い関係がわかります。</p> <p style="text-align: right;">本宮社鳥居前から見た小館跡</p>	
建造物 熊野神社 (新宮社)	<p>明治以後は熊野神社と称し、平安時代末に成立してから多くの人々の信仰を集めたことが古文書や新宮寺一切経などからわかります。</p> <p>また、神社の本殿(奥の院)は江戸時代初め頃に建てられたと考えられ、熊野信仰との関係が深い建築様式で建てられており、昭和60年、宮城県の指定文化財となっています。</p> <p style="text-align: right;">熊野神社本殿</p>	
建造物 熊野那智神社	<p>平野や太平洋をのぞむ高館山にある神社です。江戸時代の記録には、広浦の漁師治兵衛が漁で引き揚げたご神体が放った光が指した場所である高館山に羽黒権現を祀り、後に名取老女が熊野那智大社の分霊を合祀して那智神社と改称したとの由来が記されています。</p> <p>また、平安・鎌倉時代の懸仏(かけぼとけ)や、三社それぞれに伝わり氏子に配る牛王宝印(カラスゴ)などもあります。</p> <p style="text-align: right;">不動滝</p>	
建造物 新宮寺文殊堂	<p>真言宗の寺院で、本山は京都醍醐山報恩院です。別当寺として熊野神社(新宮社)の社務を司ってきましたが、明治の神仏分離令で分離され、熊野神社(新宮社)に伝わった一切経や文殊菩薩像を蔵する文殊堂を管理するようになりました。</p> <p>また、寺の裏側には、かつて別当寺があった寺山地区から移設した板碑も残されています。</p> <p style="text-align: right;">新宮寺文殊堂</p>	

<p>建造物</p> <p>下余田 熊野三社 名取老女の宮</p>	<p>名取老女が年老いて熊野詣ができなくなった際に建て、毎日参拝していた古社であるという記述が、江戸時代の安永2年(1773)に書かれた『下余田風土記御用書出』にあります。</p> <p>保安年中に高館に熊野三社が建てられた後もこの三社は信仰され、大事に守られてきました。北西1.5kmの地点には、熊野から先導した烏(八咫烏・やたがらす)の埋葬地に烏の宮が、老女屋敷があった場所は老女神社として伝えられています。</p>	
<p>遺跡</p> <p>大門山遺跡</p>	<p>中世の供養塔の一種である板碑(いたび)が250基あまり発見された遺跡です。</p> <p>経文を入れて埋めたとされる甕(かめ)や、焼いた骨を納めた集石墓(しゅうせきぼ)も見つかっています。熊野信仰布教に関わった人々の墓所や、信仰した人々の供養の場だったと考えられています。平成2年市指定。</p>	
<p>有形文化財</p> <p>懸仏・銅鏡</p>	<p>明治31年、熊野那智神社の拝殿移築時に多数見つかりました。元は神社に祀られていた鏡に仏の姿を表現して信仰の対象としたもので、柱や軒などに吊し懸けて奉納した事からの呼び名です。那智神社の懸仏は多くが鎌倉時代以降のもので、所蔵155点のうち、昭和49年、41点が国指定、114点が県指定の有形文化財になっています。</p>	
<p>有形文化財</p> <p>熊野神社文書</p>	<p>熊野神社(新宮社)に伝わる中世・近世の古文書です。文書の中には、熊野三社へ土地の寄進を行う文書、税金などの免除を約束する文書や、名取老女の熊野三社勧請を伝える縁起類などがあります。</p> <p>伊達氏が名取を支配するようになった時代にも租税免除を受けており、江戸時代以後も歴代藩主から手厚い保護を受け、深く信仰されていたことがわかります。平成2年市指定。</p>	
<p>民俗文化財</p> <p>熊野堂 神楽・舞楽</p>	<p>熊野神社(新宮社)に伝わるもので、神楽は文治年間(1185~1190)に京都から伝わった出雲の流れを汲むもので、周辺の神楽の元祖と言われます。神楽を舞う7人の社家(しゃけ)は世襲で今も厳格に守られています。</p> <p>舞楽は伝わった時期は不明ですが、渡来楽人の林家の系統とされています。神楽は春と秋に、舞楽は春の例祭時に舞われます。昭和61年市指定。</p>	

<p>その他</p> <p>能楽「護法」</p>	<p>能楽の演目の一つに「名取ノ老女(護法)」があります。</p> <p>寛正5年(1464)に公演の記録がありますが、明治時代には廃曲となっていました。</p> <p>名取老女伝説をもとにしたとされる演目で、名取と熊野の地が「いのり」によって結ばれ、「希望」への道が開かれるという大きなテーマがあります。東日本大震災からの復興へのねがいとして、平成28年に国立能楽堂で復活公演が行われました。</p>	
--------------------------	---	---

核となる文化財	関連するもの
<p>建造物 熊野本宮社、熊野神社(新宮社)、熊野那智神社、熊野神社本殿、新宮寺文殊堂、下余田熊野三社、熊野那智神社お仮宮</p> <p>遺跡 大門山遺跡、高館城、宿坊跡、熊野堂大館跡、川上遺跡</p> <p>有形文化財 熊野那智神社懸仏・銅鏡、熊野本宮永留、熊野神社文書、熊野神社神楽面・舞楽面・木造狛犬・宮太鼓、新宮寺一切経・文殊菩薩像、経櫃・経篋・経机</p> <p>民俗文化財 熊野堂神楽・舞楽、熊野堂十二神鹿踊、熊野那智神社お浜降りの神事(閉上) 熊野本宮社お浜降り神事(北釜)</p> <p>その他 名取老女伝説、熊野那智神社の由来伝説、能楽「護法」、五方の辻碑、流鏑馬</p>	<p>熊野堂大館跡出土遺物、物響寺、羽黒権現、経塚群、不動滝、観音堂(奥州三十三観音一番札所)、名取老女の墓、板碑群、熊野那智神社(閉上)、熊野神社(下増田)、伊達家文書、老女の金注連、東街道、奥大道、益田宿関所、熊野別当、名取郡司</p> <p>信仰・生活に関するもの：</p> <p>午王宝印(三社)</p> <p>動植物に関するもの：</p> <p>高野槇</p> <p>景観：</p> <p>【眺望地点】</p> <p>高館山 熊野那智神社</p> <p>【自然の風景】</p> <p>樽水ダム周辺</p> <p>【歴史的景観】</p> <p>熊野那智神社、熊野本宮社、熊野神社(新宮社)周辺、</p> <p>(なとり100選・市民環境調査による)</p> <p>伝承・伝説など：</p> <p>秀衡ヶ崎、めくらうなぎの伝説</p>

表15：関連文化財群を構成する歴史文化資源④

5. 【増田宿と洞口家・旧中沢家住宅】

名取では長い歴史の中で、山・丘陵・平野・川・海などの多様な自然環境のもと、その時々環境に応じた暮らしを続けてきました。

名取川の流れもほぼ現在と近い位置となった近世には、市中央の「増田のまち」、平野部の農村、丘陵部の集落で、それぞれの環境に応じた個性的な暮らしが展開され、名取の歴史文化の特色の一つとなっています。

市中心部にある増田地区は、南北に延びる浜堤上にあり、中世には「奥大道」と呼ばれる幹線道が通り、関所が設けられ、早くから人の往来があったことが知られています。奥州街道が整備された近世には、増田宿が設けられ伝馬など宿駅の運営を取り仕切る検断役や検断屋敷なども置かれ、物資や情報が集まり多くの人々が住まう「まち」を形成しました。街道沿いに面し、奥に細長い敷地が連続する地割は、その名残りの1つです。そこでは交通の世話を担う者だけでなく、商工業なども展開し、様々な消費活動が行われた様子も、当時の記録に見ることができます。

また、増田地区には、北町の検断屋敷跡や明治天皇ゆかりの衣笠の松、増田神社、明治を代表する建築物として主屋・蔵・庭園が一体で残っている荘司邸、板倉などの歴史的建造物も残されています。同じ街道沿いの館腰地区にも同様の町割りが残り、弘誓寺、館腰神社などの社寺、板倉などの歴史的建造物、道標、庚申塔など当時の信仰形態や生活ぶりを示す石造物が数多く残されています。

一方平野部では、より安定した農業基盤を築くため、用排水の水路の整備が進み、生産地の性格を強めました。洞口家住宅に代表される“いぐね”を象徴とする集落が形成され、水田と一体となった重要な景観が形成されました。

名取周辺の当時の農家住宅は、「でい」「ちゃのま」「なかま」「なんど」と呼ばれる4つの居室を「田」の字型に配置した、「名取型」と呼ばれる独特の間取りをしています。居室に続く解放された広い土間には、「よめかくし」「うしもち」などの名前が付けられた太い独立柱が複数建てられています。旧中沢家住宅や下増田の飯塚大同屋敷跡なども同様の特徴があります。

また、西部の丘陵付近では、愛島笠島地区に代表される、谷筋の丘陵裾に点在する集落など、比較的狭い範囲に単位集落が作られ、鎮守（個人社）、村堂、山林、ため池、畑、水田、墓地、祭礼、生業などで構成されています。愛島笠島地区には、農家の副業として養蚕を行っていた中二階構造の農家住宅や、馬の飼育も盛んであったことを示す馬頭観音などの石碑群や、軍馬の供養碑なども残されています。

同地区の国見集落では、入口や村堂などに馬頭観音や、庚申塔、山神、月山碑などがあり、様々な講が行われていました。こうした集落で行なわれる講や祭礼などは住民相互を結びつけ、伝統・文化を継承する主体ともなっています。

この地区の古い民家の建築は、主屋、作業小屋などの附属屋、蔵などで構成され、平屋、切妻造り、平入のものも見られます。屋敷地は門を入ると畑などに利用され

る前庭があり、正面に主屋、右手に同じ屋根の附属屋が直線状に並び、倉は主屋や附属屋の前面に置かれ、土蔵が主で板倉などが少ない特徴が見られます。

これら3つの環境に応じて形成された、集落や暮らしの特性を示す歴史文化資源を1つの群として捉えたものです。

●関連文化財群を構成する歴史文化資源

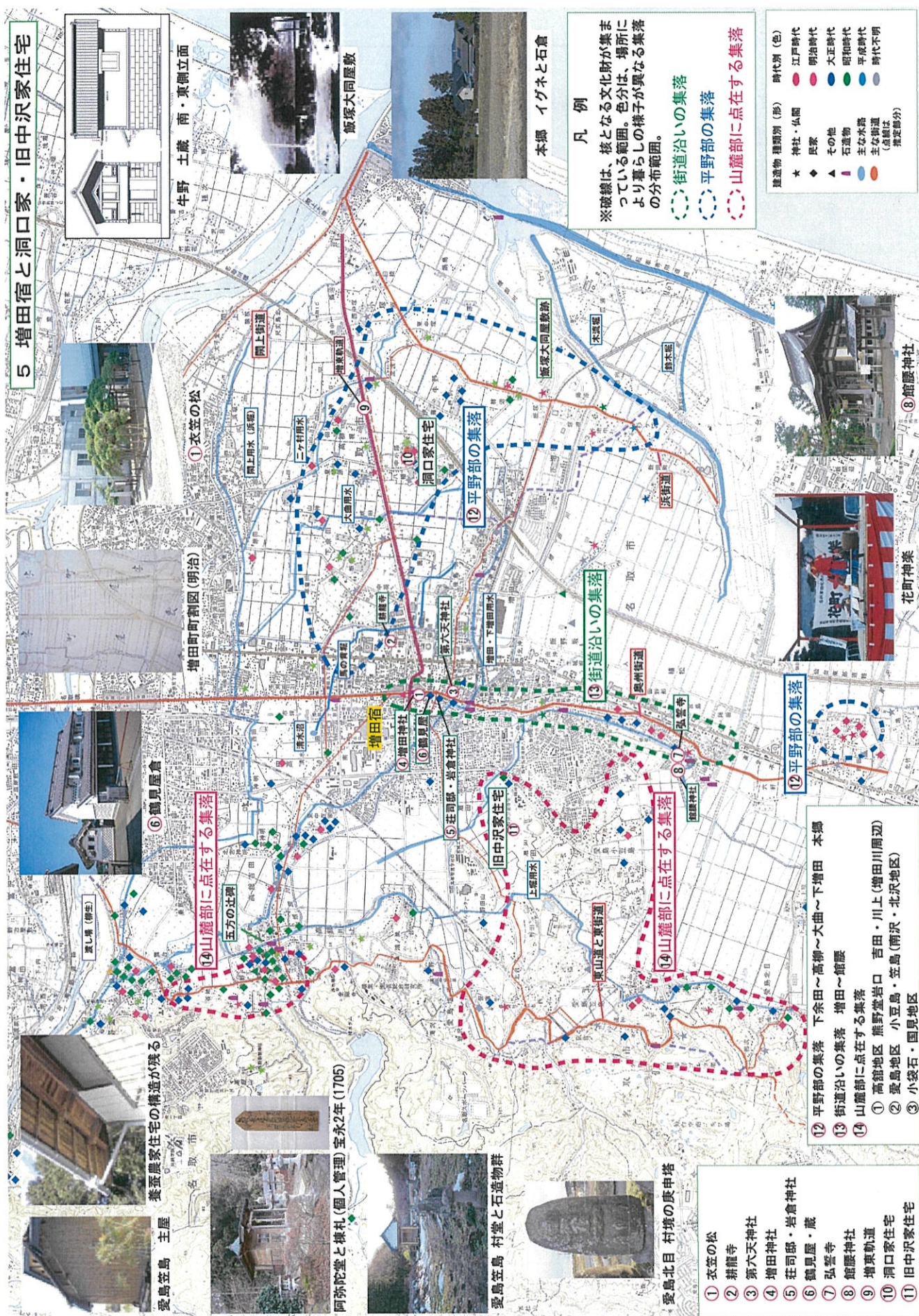
関連文化財群を構成する主な歴史文化資源としては下表のようなものがあります。

核となる文化財	説 明	写 真
神社 館腰神社	<p>弘法大師が弘誓寺の創建時に京都伏見稻荷社を分霊したと伝えられる神社です。</p> <p>明治22年に近隣の4か村が合併する際の村名の由来ともなっています。</p> <p>奥州街道沿いにあり、境内には日にちを切って願掛けすると叶うとされる日切地蔵尊(ひきりじぞうそん)などがあります。</p>	
建造物 鶴見屋土蔵	<p>江戸時代中期の創業で、奥州街道の増田宿に現在も営業している商家です。</p> <p>道路に面した敷地内に、明治10年頃に建築されたとされる二階建土蔵の倉庫、同じく白塗りでなまこ壁の土蔵や板倉、門などが残されています。2階建の倉庫は平成8年に改修され、曳家(ひきや)により建物全体を西へ10m移動させています。</p>	
建造物 洞口家住宅	<p>洞口家住宅の敷地は、堀といぐねをめぐるした近世の環濠(かんごう)を持った大型古民家で、母屋は寄棟造、茅葺、間取りは旧中沢家住宅と同じ名取型で、この形式の民家では旧仙台領内最大規模です。</p> <p>建築年代は、江戸時代の宝暦年間(1751～1763)と推定されています。母屋前には、明治21年の建築と言われる寄棟造、茅葺の長屋門と馬屋が配されています。</p> <p>昭和46年国(重要文化財)指定。</p>	
建造物 飯塚 大同屋敷跡 《現在なし》	<p>大同屋敷跡は、海岸に近い、浜堤の微高地上に立地していました。</p> <p>この地方の草分けとしての旧家で、近隣にはいぐねに囲まれた屋敷が点在し、閑静な農村景観を形成していました。</p> <p>旧中沢家などと同じく、部屋の間取りが田の字型で、土間(庭)と「なかま」に仕切りがなく開放され、土間の柱は三本を基本型とした名取型と呼ばれるものですが、大同屋敷には柱が6本あり、古い形態を示すものと考えられています。</p>	

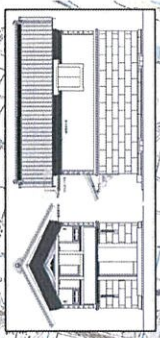
<p>その他</p> <p>『広積院日記』</p>	<p>増田宿が本格的に経営を始めたのは、承応3年(1654)とされ、『広積院日記』によれば、元禄5年(1692)に表小路水運堀普請工事を、元禄6年(1693)には裏堀の普請を行っています。43年間かかって、表、裏通りに堀ができて宿駅の体制が整いました。</p> <p>宿駅には北町と本町があつてそれぞれ検断がおかれまして。</p> <p>『広積院日記』元禄5年の記録</p>	
<p>その他</p> <p>衣笠の松</p>	<p>江戸末期～明治に増田北町の肝入検断(きもいりけんたん)をつとめた菊池氏の屋敷の庭にあつたものです。</p> <p>明治天皇の東北巡幸時、菊池氏が松の近くに小休所を設け、御一行の行在所(あんざいしょ)にしました。そこでの御休息時に随行の木戸孝允が詠んだ和歌がきっかけで命名され、昭和41年に市の天然記念物に指定されています。</p>	
<p>景 観</p> <p>大曲環濠</p>	<p>名取川の水を農業用水として利用するために六郷堰、十二郷堰などが整備され、平野部の水田に水が行きわたるようになりました。これにより大曲の洞口家住宅に見られるように家の周囲に用水路を兼ねた堀がつくられ、強風から家を守るために、また建材や燃料として利用できるように、杉などの木が植えられました。</p> <p>“いぐね”と呼ばれる屋敷林がこの地区の代表的な景観として形成されています。</p>	

核となる文化財	関連するもの
<p>社 寺 増田神社、岩倉神社、第六天神社、館腰神社、弘誓寺</p> <p>建 造 物 旧中沢家住宅、鶴見屋土倉・板倉、荘司邸（主屋・土蔵・庭園・御膳水井戸）、耕龍寺、恩賜蔵と上堀用水沿い板倉群、洞口家住宅、歴史的建造物（農家住宅、附属屋、倉）</p> <p>民俗文化財 花町神楽、カマガミサマ、住内明神、下増田麦搗き踊</p> <p>そ の 他 下増田飯塚大同屋敷跡、下増田旧鈴木家記録、北町・本町検断屋敷、巨理茶屋、「広積院日記」、「増田の町割図」、衣笠の松、七塚の伝承（増田）、弘法大師お手植えの松（館腰神社）</p>	<p>信仰・生活に関するもの：明治天皇御巡幸増田行在所及び当時の歓迎関係記録など、薬師堂石造物群（講関係）、館腰神社のナオライなど、飯野坂神輿、石造物（馬櫃神、七曜供養碑ほか）</p> <p>遺跡・建造物など：高柳北原上屋敷、名取千手観音堂（奥州三十三観音霊場 第五番札所）</p> <p>生業など：萱場刈取り関係資料及び茅葺屋根管理用具、畳表を編む道具などの民俗資料、養蚕農家建築調査及び養蚕農家聞き取り資料</p> <p>動植物など：第六天神社内へのイチョウ、ハナモモ、薬師堂のシダレ桜</p> <p>その他：陸軍増田小銃射撃場（谷津山）</p> <p>景 観：</p> <p>【眺望地点】</p> <p>高館山、野田山、十三塚</p> <p>【自然の風景】</p> <p>増田川、高館吉田～上余田の水田・セリ田、下余田～下増田のセリ田、田園風景</p> <p>【歴史的景観】</p> <p>館腰神社・弘誓寺、旧中沢家住宅、増田神社・衣笠の松、洞口家住宅</p> <p>（なとり100選・市民環境調査による）</p> <p>伝承・伝説など：</p> <p>「堰の下地蔵」「白山地蔵」</p>

表 16：関連文化財群を構成する歴史文化資源⑤



5 増田宿と洞口家・旧中沢家住宅



牛野 土蔵 南・東側立面



飯塚大同屋敷



本郷 イグネと石倉

凡例

※破線は、核となる文化財が集まっている範囲。色分は、場所により異なる集落の分布範囲。

- 街道沿いの集落
- 平野部の集落
- 山麓部に点在する集落

建造物 種類別 (形)	時代別 (色)
★ 神社・仏閣	● 江戸時代
◆ 民家	● 明治時代
▲ その他	● 大正時代
■ 石造物	● 昭和時代
■ 主な街道	● 平成時代
○ 主要街道 (点線は指定部分)	● 時代不明



鶴見屋倉

14 山麓部に点在する集落

五方の辻碑



阿弥陀堂と棟札(個人管理)宝永2年(1705)



愛島空島 村堂と石造物群



愛島北目 村境の庚申塔

12 平野部の集落

- 12 平野部の集落 下奈田～高柳～大曲～下増田 本郷
- 13 街道沿いの集落 増田～館腰
- 14 山麓部に点在する集落
 - ① 高館地区 熊野堂岩口 吉田・川上(増田川周辺)
 - ② 愛島地区 小豆島・空島(南沢・北沢地区)
 - ③ 小袋石・国見地区



⑧ 館腰神社



花町神楽

図27：関連文化財を構成する歴史文化資源分布図⑤

6. 【貞山運河と関上】

関上地区は名取川河口に発達した「まち」で、海岸文化の交流の拠点として内陸部とは異なる歴史文化資源が集積した地区でした。

そうした関上地区の大きな特徴は、名取川の河口に形成された河口港であることや、漁業が主な生業として大きな位置を占めることに由来します。

関上地区は、近世以前の資料が殆ど残されておらず、詳細はわかっていません。これは、近世以前の「ゆりあげ」が、名取川の氾濫などに強い影響を受け、その都度、生活の場所を移したり、過去の生活の痕跡が失われてしまったりしたことと無関係ではないでしょう。関上地区に暮らした人々は、そのような中で「再生」を繰り返しながら、広浦の縁辺や名取川河口部を中心に生活を営み、現在の関上の「まち」を形づくってきたのでしょう。

名取川河口部の「ゆりあげ」は、中世末の海運関係の古文書にその名が見え、当時から仙台と外洋をつなぐ物資運搬の拠点として知られていました。

近世には仙台藩直轄の漁港となり、初期には材木・米などの物資の集積地や漁港として知られ、「木曳堀」を前身とする「貞山運河」は、当初、主に仙台城下への建築資材の運搬などに利用されていました。

陸路では、名取川堤防上の中田村の境まで続く「仙台道」は、五十集の人達も、魚介類などを売り歩きました。明治時代には東北本線開業に伴う物資運搬用トロッコ設置の必要から、増田と関上を結ぶ「増田新道」が整備され、二つの「まち」を結びました、この新道は後に大正末期から昭和初期にかけて増東軌道が走るようになります。

核となる文化財には、漁業・五十集・かまぼこなど生業に関わる民具資料、湊神社・東禅寺・下増田神社（北釜）などの境内に残る石造物や地藏堂の千体仏など、信仰・習慣に関わるものがあります。民俗芸能には関上大漁唄込み踊りがあり、その他、湊神社文書、日和山の築山、開運橋、「関」の字の由来や、太郎丸の伝承、関上八景などの景観を含め、当時の人々の暮らしや思いを伝えるものが多数あります。

また、東日本大震災では関上・北釜地区を中心に、多くの貴重な歴史文化資源が失われてしまいました。江戸時代以降、防風・防潮のため海岸に沿って植林された松林も大半が失われてしまいました。ただ、過去もそうであったように、くらしの「再生」に向けた取り組みが現在進められています。

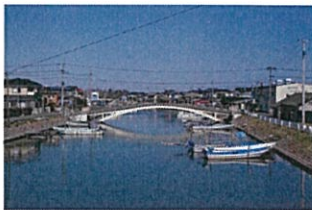
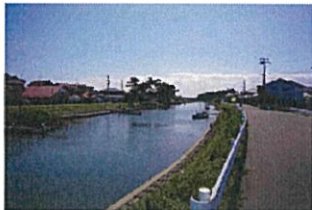
このような災害を伝える資料として、昭和三陸地震に伴う津波被害を受け、後の警鐘のため建てられた、震嘯記念碑や震嘯記念標柱、建設の経緯を示す公文書があります。また、地震・津波だけでなく火災なども含めた災害に関する近世の記録として『広積院日記』がある他、下増田飯塚古墳群の調査で発見された古代の津波痕跡や、原遺跡で確認された墳砂や褶曲などの地震痕跡も含んでいます。近世の津波からの再生を物語る伝承や絵図なども関連するものとしてあげることができます。

ここでは貞山運河などの関上・北釜地区の特色や、人びとの生活や思いを伝える歴史文化資源だけでなく、洪水、地震、津波などの記録や東日本大震災により失われた文化財を含めた「再生」への手掛かりとなるものを将来への文化資源として一つの群の中に捉えたものです。

●関連文化財群を構成する歴史文化資源

関連文化財群を構成する主な歴史文化資源としては下表のようなものがあります。

核となる文化財	説 明	写 真
民俗文化財 関上大漁 唄込み踊	<p>関上には古くから大漁唄が伝わっており、伊達政宗公が関上の浜を散策された際、土地の漁師達が披露したと言い伝えられています。一方、大漁祝唄は、明治初期に千葉県銚子港より伝わり当地風に変化させたものといわれています。</p> <p>関上大漁唄込み踊は、この大漁唄と大漁祝唄とを合わせ、踊りとして振りを添えたものです。以前は、大漁を喜んで漁師達は港口から威勢よく板子をたたき、拍子を取って魚市場まで唄いこんだといわれ、大漁にわく浜の男達の心意気を唄と踊りで見事に表現しています。昭和47年市指定。</p>	
民俗文化財 関上錨祭り	<p>この祭絵図は昭和20年代に模写されたもので、右下には「筆者不明安政年間以前関上浜大漁祈願 錨祭ノ図 領内祭集ヨリ・・・」の詞書があります。安政年間(1854～1859)以前から関上浜では大漁を祈願し錨を供養する行事のあったことが書かれています。この図以外に詳細な記録は残っていません。</p>	
石造物 津波標柱、津波 碑関係文書	<p>市内には昭和8年(1933)三陸地震の後に建てられた津波碑1基と標柱1基が残されており、標柱は碑文から第1～4号の計4本建てられたことがわかっていましたが、正確な場所や設置年、経緯などは不明でした。</p> <p>平成28年3月11日に、貞山堀の底から第3号の標柱が発見されました。その後の資料調査の結果、津波碑と4本の標柱が同時に建てられたことや、4本の標柱それぞれの設置場所が記されていました。</p>	
その他 日和山の築山	<p>大正9年、船の出入り、気象、海上などを見るため在郷軍人分会が声をあげ、日和山建設計画が発起されました。</p> <p>これに多くの人々が賛同し、勤労奉仕によって工事が進められました。この建設には、中島町の命名者として知られる当時の第2師団長・中島正武中將も加わったそうです。山頂には、湊神社から遷座された富主姫神社の社殿と、この頃建立された忠魂碑があります。</p>	

<p>建造物 開運橋 《現在なし》</p>	<p>開運橋は、昭和3年（1927）に貞山堀に架けられた市内唯一のアーチ橋で、近代文化遺産の1つでした。橋長30.72m・幅員（ふくいん）3.3mの鉄筋コンクリート製の橋で、昭和初期からの歴史を持ち、貞山運河やかつての閑上の街の風情を今に伝える貴重な橋として親しまれ、なとり100選にも選ばれていました。震災により現在は失われています。</p>	
<p>建造物 貞山運河</p>	<p>阿武隈川河口から松島湾の塩釜市牛生までを結ぶ運河で、近世の初めから三期に分けて工事が行われました。 貞山運河の名称は、伊達政宗の「貞山公」にちなみ、明治になってから付けられた名称です。阿武隈川から名取川河口の閑上までは、「木曳堀」（こびきぼり）を改修したもので、仙台城下への建築資材等を運搬したと伝えられています。</p>	

核となる文化財	関連するもの
<p>民俗文化財 閑上大漁唄込み踊、閑上錨祭り 石造物 津波碑、津波標柱、大禮記念植樹、道標（閑上街道）、明神堂跡と石造物群 古文書 湊神社文書、広積院日記、昭和三陸津波・津波碑関係文書 遺跡 下増田飯塚古墳群水田・水路（津波痕跡） 建造物 貞山運河、下増田神社、開運橋（流失） その他 閑上土手の松並、日和山の築山、防風・防潮林（流失）、増東軌道、閑上八景</p>	<p>災害の記録など：原遺跡噴砂・褶曲、東日本大震災津波碑（耕谷） 生業など：閑上漁港、大漁旗・ザル・ブリキ水桶・閑上大黒丸・二カゴ・錨など民俗資料、ササカマの型など生産に関する道具、五十集など戦前からの生活を物語る聞き取り資料、さくば（作業船） 絵図など：伊能忠敬『測量日誌』 動植物など：クロマツ植林、コウボウムギ群落、ケカモノハシ群落 景観： 【眺望地点】 閑上大橋 【自然の風景】 名取川、貞山堀、閑上海岸・港、 【歴史的景観】 閑上土手の松並、下増田神社 （なとり100選・市民環境調査による） 伝承・伝説など：「高館山羽黒飛龍権現」「鶴塚」「閑上中町太郎丸」「御仮屋」「円光の杉」</p>

表 17：関連文化財群を構成する歴史文化資源⑥

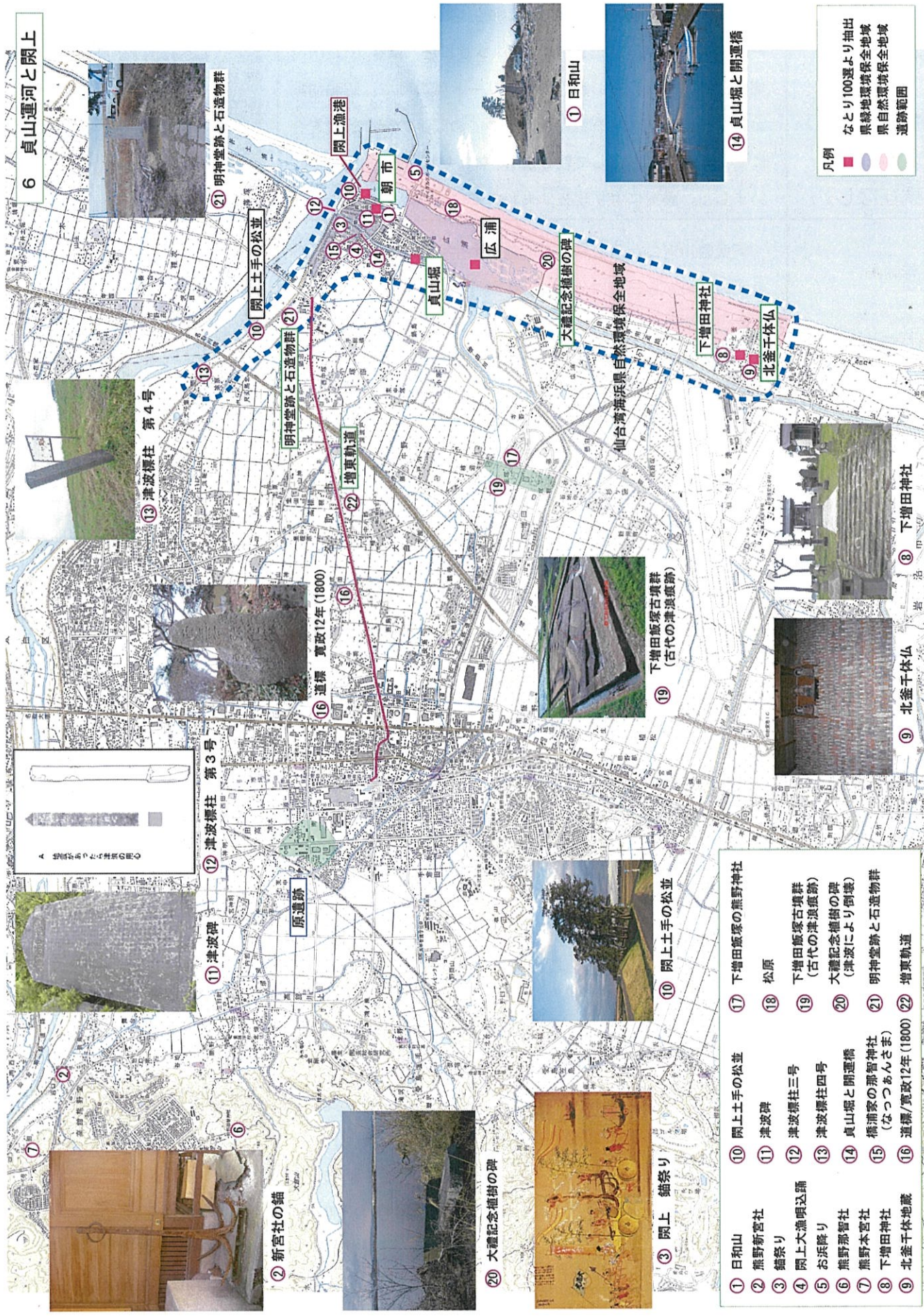


図28：関連文化財を構成する歴史文化資源分布図⑥